

平成 29 年度第 1 回川崎市地域包括ケアシステム連絡協議会 摘録

平成 29 年 8 月 18 日（金）午後 4 時～午後 6 時 15 分
第 3 庁舎 15 階第 1、第 2、第 3 会議室

事務局

【開会の挨拶】

福田市長

- 地域みまもり支援センターができてから、1 年以上がたっているの、各区の担当者とも意見交換をして、いろいろな課題が出てきていると思う。
- 各局、全庁を挙げて、地域包括ケアが全ての局に関係するのだということが、しっかりと定着してきた。
- 新たな地域づくりの取組を全庁挙げてやっていかなければいけないと思う。また、今日お集まりの皆さんと顔の見える関係で、それぞれの地域でやっていくことが何よりも重要だと思う。

田中座長

- 慶應義塾大学で寄附講座があり、そこで医療・介護のイノベーションをさまざま取り上げているのだが、先日、川崎市を取り上げて川崎市の地域包括ケアシステムの進展について議論をした。
- 川崎市の取り組みがどれだけ他の人に学びを与えることができるか、市の中で進んでいくことは素晴らしいが、それ以上に川崎市に属しない人たちにとっても学びを与えているところまで来ていると思う。しかし、決してゴールにいるわけではないので、さらに進めていくための会である。

地域包括ケア推進室（鹿島）

【資料「地域包括ケアシステムの取組の検証について（案）」】

資料について説明

上野会員（川崎市社会福祉協議会）

- 資料の 2 ページに、「包括的相談支援体制」という項目が右側にある。ここに社会福祉協議会に対し、「区（地区）」と書かれているのだが、社会福祉協議会は市と区と地区とあるので、ぜひ社会福祉協議会一本でお願いできたらと思う。
- 民生委員児童委員の方々が地域における相談をかなり多くの数やっていたいっているので、ぜひ入れていただけたらと思う。

田中座長

- 9 ページの右側に「入院医療から在宅医療・介護まで」とあるが、在宅生活があり、時に入院するということであって、入院からではない。始まりは在宅からである。そういうコンセプトをしっかりと持つべきと考える。

須藤会員（川崎市看護協会）

- 視点2の「安心して暮らせる住まいと住まい方の実現」の障害児者施策の課題等についても、生活がやはり先にあると思っている。
- 「あんしん見守り一時入院等事業」という事業で、医療的ケアがあっても在宅で頑張っている方々も担当しているが、まだまだ短期入所が足りない状況を実感している。
- レスパイト的な選択肢が増えるように今後も取り組んでいただきたい。

福森（かわさき市民活動センター）

【資料「かわさき市民活動センター リーフレット」「ボランティア・市民活動情報誌ナンバーゼロ】

- 公益財団法人かわさき市民活動センターは、2003年に設立され、現在武蔵小杉駅の駅前にある中原市民館と同じ建物に入っている。1982年に設立された川崎ボランティアセンターが前身になっている。
- NPO法ができた3年後に、市民活動支援指針ができ、これを具現化するための組織として市民活動センターが開設された。
- さまざまな社会資源、公的資源、パブリックリソースを循環させて市民活動団体に提供することが私たちのやっていることである。
- 誰もが暮らしやすい社会の創造ということを掲げてやっている。個々の地域で活動している小さなボランティアサークルやボランティアグループ、大きなNPO法人が、世の中のため、地域課題を解決するためにやっていて、一つ一つの団体がお互いの課題を解決することによって、総じて世の中が住みやすくなるということを究極の目標としている。
- 全市をエリアとする唯一の総合的な中間支援の市民活動センターである。
- 事業内容としては、5つの柱で社会資源、地域資源を団体に提供している。ヒト、モノ、カネ、情報、ネットワークを5本の柱にしている。
- まず、物については、当センターは全市の拠点ということで、武蔵小杉に1つセンターを設けているほか、こども文化センターを地域の拠点と位置づけて、市民団体に会合や印刷、打ち合わせなどで活用していただいている。また市民活動団体、非営利の団体に事務所を貸し、巢立ちを応援している。
- 次に資金について、こちらはかわさき市民公益活動助成金を団体に交付している。毎年60団体から70団体に活用されている。
- 情報提供では、ボランティア活動に関わるさまざまな情報をいろいろな媒体を通じて提供している。ボランティア活動、市民活動に関心があるという方はかなりいらっしゃるが、情報がないから参加できないという声をよく聴く。まだまだ行き届かないところがあると思っている。
- また、地域のため、社会のために活動する人材を育成し、スキルアップしていただけるように、さまざまな講座を行うなど、側面支援している。
- 最後はネットワークである。いろいろな分野の団体に、一緒に集って交流していただいて、新しい活動を起こしていただくことを目的に、さまざまな出会いの場を設けている。

- このような5本柱でさまざまな社会資源を団体に提供して、側面支援、伴走支援を行っているのが当センターである。今後とも有効に活用していただきたいと思う。

霜越会員（川崎市青少年指導員連絡協議会）

- 中高生の居場所づくりとしてどのような取り組みをされているか。

福森（かわさき市民活動センター）

- こども文化センターは地域の子どもの放課後の居場所と位置づけられているので、十分その辺は広報している。
- また、こども文化センターでは、中高生年の利用促進ということで、主体的な活動を尊重しつつ、異年齢交流事業や様々な行事を開催している。

西野（幸区柳町自治会）

- 親がここに行ってみたらと勧めるのみで、子どもが自ら行こうとはしない。センターから、こういう事業をやっているということを、区あるいは市全体に知らせなければ、補助金がいかにうまく利用されているかというのは見えない。
- 子どもたちはたくさんいるので、各区の町内会などいろいろなところにお話をいただければと思う。

福森（かわさき市民活動センター）

- 当センターは、地域に根差した現場を持っていないので、こちらから出向いていかないといけないと常々思っている。

渡辺会員（川崎市薬剤師会）

- 居場所づくりの中に、職場体験できるようなことは考えられないか。子どもたちの放課後の体験の場所としていかがか。

福森（かわさき市民活動センター）

- こども文化センターでは、地域の小中学校の依頼により、職業体験の受け入れを各館で行っている。

田中座長

- 子どものさまざまな居場所に、時間ができた団塊の世代の市民が手伝いに来るといったことはないのか。

福森（かわさき市民活動センター）

- 最近では地域の先輩で、得意なことや技能を生かして教えてくださる地域講師と呼ばれる方が活躍している。ベーゴマや竹とんぼなどの昔の遊びを教えてくれる地域の方はたくさんいらっしゃる。

石渡区長（幸区）

【資料「幸区ご近所支え愛モデル事業報告書」「幸区ご近所支え愛モデル事業の取組」「さいわいガイドマップ】】

- 幸区においては全ての業務が「地ケア」に通じるをモットーにして、区役所全体での取り組みを推進している。
- その具体的な取り組みとして、ご近所支え愛モデル事業をこれからご紹介させていただく。
- 前提として、まず幸区の地域特性を2つご紹介する。1つは、区内でも高齢化の進んでいるところ、子どもの人口が増えているところなど、地域事情が異なる点である。小さな地域でのきめ細かい対応が今後必要になっているということが、課題としてある。
- 次に町内会・自治会の加入率が幸区は68.5%ということで、他の区より高くなっている点がある。幸区としては地縁組織としての町内会・自治会がとても強みである。そういった地域のつながりが強い主体を生かしていきたいと考えている。

西野（幸区柳町自治会）

- 柳町自体はかなり広い面積であるが、その中が、旧東芝・キャノン、変電所、JRの南武線、あるいは国道等で分断されていて、敷地は広いが実際には20%から30%の非常に狭い町会である。町会費も非常に安く経営が困難である。
- 柳町そのものは国道あるいは道路等で分断されていて、堤根の清掃局の通りと南武線の間の狭い敷地の中に約125世帯が住んでいる。
- 平成20年度ぐらいから災害時要援護者や高齢者がどこに住んでいるかというマップを作り、全部把握している。町会に入っている人、いない人を問わず網羅している。
- そのマップを利用して、支え愛が始まったときに支え愛の対象者もそこに落とし込み、近くの人たちがそこに見に行けるような体制をとっている。
- 周りの人たち、若い世代も取り込むためには、モデル事業で1人が1人を見るのではなく、町内会全員で見る体制をつくっていくのが一番いいのではないかと。何かあったときに担当がいなくても、隣の隣にいる担当が私を助けてくれるという形で進めている。
- 誰が誰を見るのではない。みんなで見よう。町内会が全員でその人たちを見よう。ただ単に見るのではなく、その人たちの個々の性格、生活状況があるので、個々に合わせた見方をしている。話が好きな人、家庭の中に入られては困る人、いろいろな人がいるので、そういうところを見極めて見ていこうという形である。
- 老人だけではなく障害者もたくさんいる。目の見えない方、難聴の方、そういう方も全てその中に入っている。それを含めて子どもから大人まで一緒に集える場所を少しずつでもつくって行って、老人たち、障害者の人たちがそこに来て、少しでも楽しんでいる場を1年に何回かつくられればいいという思いで、町内会の運営を一生懸命やっている。

黒岩会員（日本女子大学）

- どういう方が部会員として一生懸命やっというのかを教えてください。

西野（幸区柳町自治会）

- 民生委員、町内会の各部会長、青年部もあれば、子ども会、老人会の各役員さんに入っている。できるだけ若い人に入っていたきたいのだが、平均年齢は70歳を超していると思う。

中澤会員（川崎聖風福祉会）

- この事業の良いところは、モデル事業の枠組みの対象者をいい意味で無視している点である。
- 事業という枠組みをはめると地域の方々の活動にある意味一定の制限をしてしまうのではないか。互助は本当に自由でなければいけないと思っているので、そこを相当危惧したのだが、西野会長をはじめ3町会長とも自分たちが必要だと思う人をしっかり見ていくというスタンスを持たれていた。区役所も翌年から、部会が必要と認める人に要綱を広げている。
- 会長たちが自分たちの現状を最優先にして、これを進めてきているところが非常に大きなところだと感じる。

田中座長

- 一番、町を知っていらっしゃる会長が、枠組みを無視してというか、自由に動いて、それを区長が認めたように、互助とはそういうものであろう。

松浦（宮前区・地域みまもり支援センター）

- 宮前区は町内会・自治会を基本とした支え合いの他、自治会間の連携やボランティアによる組織的な地域の見守り活動など、以前から住民主体の活動が盛んであることが特徴である。
- 複数の自治会や関係機関が連携して活動している地域がある一方、活動の盛んでない地域もある。こういった地域で活動が湧き上がり、さらに継続されるよう、住民の主体性を丁寧に取り出してバックアップしていくことが区役所の役割と考えている。
- また、どの地域にも言える課題が、後継者の不足である。宮前区では将来の担い手の育成として、小中学生を対象にした啓発事業を展開しているところである。

川田（稗原ゆ〜ず連絡会）

【資料「稗原ゆ〜ず連絡会 発足への道程と活動紹介」「オープン時の配布チラシ」

「27年度・28年度事業報告」「みずさわの道」（障害者支援施設 みずさわ広報誌）】

- 稗原ゆ〜ず連絡会の活動エリアは、宮前区の西側の稗原地域7自治会である。
- 鷲ヶ峰西住宅では24年度から1年半、国のモデル事業の安心生活創造事業を行った。自治会と行政が連携して孤立死や虐待を防ぐことを目的としたものである。この事業は26年3月で終了したが、モデルとなった私たちの役目はこれから地域に発信することだと考えた。

- 今後の高齢者問題はどの自治会にも大きな問題となると考えていたので、自治会だけではなく、地域にある施設にも呼び掛け、いろいろな分野と地域福祉を進める団体を立ち上げ、27年6月に稗原ゆ〜ず連絡会という名前でスタートすることになった。
- 連絡会には稗原小学校区の全自治会と、小学校、老人介護福祉施設、障害者支援施設、老人いこいの家、認知症専門病院、地域包括支援センターの14団体が加入している。連絡会には毎回、宮前区役所向丘出張所職員と、現在は地域みまもり支援センターの保健師が参加している。
- 平成27年10月には、連絡会の拠点とさせて頂いた地域のコミュニティーカフェ「ユーズカフェ」がオープンし、連絡会の事業も本格的にスタートした。
- 連絡会はほぼ2カ月に1度開催している。1年目は施設のお祭りに出張カフェを2回出店した。続いて、巡回講座「健康でいるためのコツ教えます」を9カ所で開催した。同時に健康推進チームを立ち上げ、毎月2回の健康づくり教室を障害者施設でスタートした。
- また、「認知症あれこれ 聞いて話して」というテーマで、認知症の4症例を学ぶ勉強会を開催したほか、近くで生の音楽を楽しんでいただく目的で、宮前区役所のロビーコンサートに出演されたバイオリン奏者、28年度はオペラ歌手をお呼びしてコンサートを開催し、同時にバザー、カフェなどを行い、運営資金づくりをしている。
- さらに、自治会の壁をなくす目的で、合同バスツアーを実施しているが、各自治会で連絡会の存在を知ってもらう機会にもなった。
- 2年目の事業では、新しい企画として脳トレ・筋トレを、身近な集まりの場でしていただくために、地域リーダー養成講座をスタートさせた。遠くに行かなくても、講師を依頼しなくても、お手軽に体を動かすことを日常茶飯事にできることが目的である。
- また、巡回講座の認知症サポート養成講座では、最終日の小学校では教員研修として開催している。
- 3年目には、若いママたちが行う事業として、「ゆ〜ずクラブ」を発足し、クラフト市を企画した。こうした若い人が地域に出てくるための受け皿づくりは、地域を活性化するために進めたい取り組みとなっている。
- 連絡会には子どもから高齢者までさまざまな分野が参加しているが、入所・通所の障がい者支援施設も入っているのも、自然に交わる機会がある。
- 今後も稗原ゆ〜ず連絡会は人が出会う場、健康を維持する場、知らないことで抱く偏見を知ることを取り除いていく場、そして若い人の活動の場となる取り組みを行っていく。

黒岩会員（日本女子大学）

- 最近、私たちの大学とはぐるまの会の工房さんともいろいろコラボでやろうということで、料理教室なども一緒にやっている。川崎市では子どもからお年寄りまで、そして障害があってもなくてもとっているが、なかなか難しい。障害を持った方たちとともにつくっていく地域は非常にいいと思った。

渡辺会員（川崎市薬剤師会）

- 農業体験やものづくり体験など、そういうものを子どものころから、町内会の人たちに教

えていただけると、とてもいい子が育つのではないかと思った。

福田市長

- 素晴らしい取り組みで見事だと思った。1つの自治会ではできないことを、7つの違う自治会が、昔から防災訓練をやっていたということがあって、自治会の壁をなくして横に広げていくというのは、本当に素晴らしい取り組みだと思った。
- 代表の川田さんの思いやリーダーシップという部分が非常に強いのではないか、成功の秘訣になっているのではないかと思う。こうやってまとめていくに当たって、リーダーとしてどういうことを一番心掛けていらっしゃるかということをお聞かせいただけるとありがたい。

川田（稗原ゆ〜ず連絡会）

- 発足する当時の会長たちの交流が活発であったことと、施設の方たちが社会貢献をしたいという気持ちをそれぞれ持っていたことで足並みをそろえてできた。これは地域包括ケアシステムの考え方が大きな基盤になっていると思う。
- 地域で支える地域包括ケアシステムを考えたとき、自助努力的なものがあまりなかった。それに対して、行政や事業所が私の分野ではこういうことができると協力してくれたということが、今の連絡会の推進になっていると思っている。

田中座長

- 地域包括ケアシステムの主体は市民で、行政は黒子で、専門職はサポーターであると私は言い続けている。まさにそうなりつつある。大変結構である。

霜越会員（川崎市青少年指導員連絡協議会）

【資料「ふれあい中原」】

- 中原区の『ふれあい中原』という広報紙をお持ちした。各区でこういう広報紙は出しているのだが、中原区は年2回、3月と10月に75町会に回覧として出している。部数は8,500である。町会員の皆さんになかなかわれわれの存在を分かっていたいていないことが多く、認知度が低いのではないかということで、この広報紙を通じて活動を分かってもらおうと発行をしている。
- 中原区青少年吹奏楽コンサートについては今年で28回目ということであるが、中高生に運営に関わっていただいて一緒にやっている。多世代交流という感じでやってきたことが、このように長く継続できる要因ではないかと思っている。
- 私たちも普段、中原区では年間100回のパトロールをやっているのだが、街なかで子どもたちを見かけたら、何にしろ何もしていなくても声を掛けるということを今徹底してやっている。やはり声を掛けることによって子どもたちも、おじさん、おばさんたちが私たちを見てくれているのかなという思いになってくれれば、私たちの活動をやっている意味が非常に高くなる。

- 単独の事業ではパトロール意見交換会がある。中原区には8中学校区があるので、年2回区役所で意見交換会をやり、情報交換もして、皆さんの意見を聞きながら今後の活動に役立てようということをやっている。
- 毎年7月の全国の社会環境強調月間のときに街頭キャンペーンをやっている。子どもたちから、自転車の無灯火や信号無視、歩きながらのスマホの操作などは結構大人が多いということ指摘された。私たちもしっかりと大人の自覚、責任感を持って今後活動していきたいと思っている。

須藤会員（川崎市看護協会）

【資料「訪問看護ステーション活用マップ」】

- 昨年度は66ステーションを掲載していたが、本年4月の時点で73ステーションになっている。訪問看護で安心の在宅療養を支えていきたいと思っている。
- 本年も川崎市在宅医療市民シンポジウムを開催する。本年のテーマは「最後まで住み慣れた地域で暮らし続けるために」で、11月26日日曜日午後開催する。

関口会員（川崎市医師会）

【資料「平成29年度地区在宅療養推進協議会の取組計画について」】

- 地区在宅療養推進協議会は医師会だけでやっているものではない。歯科医師会、薬剤師会、看護協会、介護支援専門員連絡会などの会の方々と一緒に取り組んでいる。医師会が代表して報告させていただく。
- 多くの区で多職種連携ということをやっている。これは一体的なケアの提供の仕組みづくりということになるかと思う。
- さらに介護予防や在宅療養のテーマに市民公開講座を各区で開催している。これは意識づくりということに役立っているのではないかと思う。
- 看取りの推進ということに関して、特別養護老人ホームで何とかもう少し看取りを推進できないか。平成30年度から取り組みが開始できるのではないかと考えている。

谷会員（上布田 つどいの家）

【資料「中野島つながり愛カフェ」】

- 今日、お配りした「中野島つながり愛カフェ」というものは、もともと私どもの事業所で行っていたカフェと、健康長寿医療センターや区役所と連携して取り組んでいる「中野島つながり愛プロジェクト」とコラボレーションしたものである。
- これにより、お子さま、若いお母さんが平日昼間に遊びに来ていただいて、より活性化をしてきたというところが良かったと思っている。

中馬会員（川崎市介護支援専門員連絡会）

- 4ページにこのシステムの認知度が実態調査からは53%とお聞きして、認知度53%は低くはないと私は思っている。まず、このシステム、組織を知ることがないと次に理解するということにつながらないので、半数以上の方が知っているということは非常に成果

ではないかと私は感じている。

- 「健幸福寿プロジェクト」に関しては、金賞をいただいた。自分たちがやっている支援を認めていただき、チームケアを認めていただくチャンスは本当はない。非常に嬉しかった。
- 「地域資源のつなぎ方」のツールに関してだが、川崎市の取り組みをいろいろな業界紙等に発表していただいているおかげで、神奈川県内だけではなく、県外からもすごいということで、今回、東京都内の国分寺市からもぜひ講義に来て欲しいと依頼が来ている。
- 神奈川県協会の研修等で取り入れたこともあり、かなりの反響を呼んでいる。横浜市では早速これを取り入れて研修をやっていただいている。
- 川崎は、顔の見える関係は本当によくできている。「健幸福寿プロジェクト」にも見えるように、個々のチームケアは非常によくできている。
- 多くの課題を抱えたケース等について、自分たちの体験を財産として共有し、それを積み上げて次のステップに生かしていくような、そのような、顔の見える関係ではない次のステップの関係が、今非常に必要である。もっと実践的なものにつなげていかなければいけないということを日々感じている。

渡辺会員（川崎市薬剤師会）

【資料「地域連携のためのアンケート」「地域の薬局に関するアンケート」】

- 国からかかりつけ・健康サポート薬局というものが出来、薬局として3つのことをしなければならないとなっている。保険調剤はもとより OTC※の販売という、健康寿命を延ばすために普通の薬やサプリメントの相談販売をするようにということである。また、介護の支援をするようにということで、在宅医療の推進の薬のほうである。それから、相談に来た方を地域包括支援センターにつなぐという事業を、薬局はこれからやっていくということがいわれている。
- ケアマネ協議会の中馬先生にお願いして、この春にアンケートをとった。アンケートの結果を踏まえた反省点として、地域担当者会議に呼んでもらえるように私たちも一生懸命努力する。呼ばれたらすぐに行くような薬剤師、すぐ行動できるような薬剤師の態勢をつくっていくということである。医師、歯科医師との連携は、薬局は不可欠なので、相談して服薬管理と残薬のポリファーマシー※、残薬処理に取り組む。医療費を減らすためにまだ使える薬は使っていくということである。

※ OTC：一般用薬品

ポリファーマシー：有害事象、コンプライアンスの悪化

上野会員（川崎市社会福祉協議会）

【資料「川崎市社会福祉協議会 平成 29 年度事業計画」】

- 社会福祉協議会という名前は皆さんご存じだと思うが、実際の事業内容、活動内容がいまひとつ理解されていないということを、私どもは認識をしているところである。そういう意味では、地域包括ケアシステムを進めていくに当たっては、見える化、分かる化ということが重要だと考えている。資料の中で、1 ページ目の真ん中に、地域包括ケアシステムうんぬんのところで、社会福祉協議会の役割、存在が一層重要さを増していくということで

ある。ぜひ地域の市民の皆さま方、地域の団体の方、関係機関の方々に社会福祉協議会があつて良かった、役に立つと言つていただけるような事業を進めていきたいと考えている。

柿沼会員（川崎市認知症ネットワーク）

- 「RUN 伴（ランとも）」で、認知症になつてもまちで安心してみんなと暮らせるまちづくりをしたいという願いで、北から南までずっと願いを込めたたすきをつないでいる。昨年は川崎でも 160 名が参加した。昨年は北から南まで 1 万 3,000 人の人がたすきをつないでいる。今年も川崎チームを結成してぜひ参加したいと思う。関口先生は実行委員である。大変心強い。それで、今年川崎の第 3 庁舎の下からスタートして、ゴールは中原区役所、さらにその先は横浜チームにバトンタッチするので、谷さんたちの特別スピードランナーをお願いするということで計画している。
- いろいろな方が参加される。お子さんから、障害者、シニア、みんなが一緒になって参加する。目指すところは地域包括ケアシステムの「C o l o r s」である。ぜひよろしくお願ひする。

佐々木会員（川崎市老人福祉施設事業協会）

今回、お話をお聞きして、本当に新たな発展した段階に立ったのだなと思つている。というのは、当時やはり目標にしていた町会、まちぐるみの取り組み、それから、当時はできなかったのが、高齢者のみで縦割りだったのが、子どもや障害者を巻き込んだ対応をしている。それから、公的な関係機関、地域包括支援センターや障害者相談支援センター、みまもり支援センターなど、本当にいい意味で縦割りではなく、公的機関が介護を黒子で支えている。こういった意味では本当に新たな段階に達している。

島田会員（川崎市全町内会連合会）

- 合理的にいいのは、町内会ぐらいのところでお互いに連携した、非常に共有する場面が多い。例えば祭礼や運動会、あるいはまた社会を明るくする運動等を通して、地域に関係することに關心を持ってもらわなければいけないので、具体的なものがないと、なかなか人が集まらない。いろいろと人を集めてもらって、町内会に加入していただくという工夫は、現在私どもはしている。
- 今日の皆さん方の話を聞くと、どれも地域には課題として出てきてしまつている。その際、行政やそういった方との中でいろいろと勉強していかなければいけないということである。一番課題となっているのは、町会、住民組織に対する理解、これに加入していただきたいということ、今つくづく感じた。

田中座長

ありがとうございます。地域包括ケアシステムは要介護高齢者のためだと思つている自治会がまだないわけではない。健康な高齢者はもちろん、子どもたち、青少年、障害者、全てに話が広がっているのは、皆さんのここからの取組である。中馬さんも言われたが、われわれが思つている以上に川崎市は進んでいる。決してゴールインしているほど進んではないが、ゴー

ルに向かって近づいているスピードではないか、誇りに思っているのではないか。

伊藤副市長

- 会員の皆さんそれぞれのお立場から貴重な報告があり、もしくはそれに対する熱心なご議論をいただいた。私たち行政としても、多くのパワーをいただいたような気がする。一方で、自助、互助の裾野を広げる難しさといったものも痛感した。
- ロードマップの第1段階としての土台づくりが今年度で終わって、来年度からは第2段階へ入ってくる。いよいよ川崎らしい都市型の地域包括ケアシステムづくりに向けて、エンジンをフル回転していく状況である。
- ぜひ会員の皆さま方、今後も引き続きご指導をよろしくお願ひしたい。